第1章　近現代史の概観

はじめに，ウズベキスタンの歴史，特に近現代史を概観しておこう．後でもふれるように，ウズベキスタンという国の枠組みができるのは，ソビエト政権下の1924年のことであり，それ以前の歴史は，中央アジア南部オアシス地域の歴史として展開してきたことを確認しておきたい．

中央アジア南部オアシス地域とは，天山山脈やパミール高原から流れ出るシル川やアム川，ザラフシャン川などの流域に成立し，古来より灌漑農業や交易によって栄えたいくつもの都市で知られている．サマルカンドやブハラなどはその代表的な存在であり，いずれもユネスコの世界遺産に指定されている．

この地域は8世紀以降アラブのもたらしたイスラームがしだいに根をおろし，また北方の大草原から移動，定着を繰り返したトルコ系遊牧集団のために，住民の主要な言語はイラン系の言語からゆっくりとトルコ系の言語へと変わっていった．現代のウズベク語もトルコ系の言語であるが，それ以前のイラン系，具体的にはペルシア語（タジク語）の要素が濃厚にみられる．

この中央アジア南部オアシス地域では，13世紀のモンゴルの侵攻以降，トルコ系出自の王朝が興亡を繰り返した．なかでも，サマルカンドを首都としたティムール朝は，遊牧民の軍事力と定住民の生産力および経済力を統合して強大な政権を樹立したことで知られている．15世紀末に北部の草原地域から南下してティムール朝を打倒したウズベク遊牧集団は，以来この地域の支配者となったが，部族間の対立は根強く，政権はしだいに分立することになった．農業と遊牧，そして交易を基盤としたこの地域の経済は，近代世界の急速な発展からは明らかに取り残されていった．

1. 帝政ロシア統治下の中央アジア

1820年代に中央アジア最大の遊牧集団カザフを直接の統治下に収めたロシアは，1860年代半ばになると，南部オアシス地域への軍事遠征を開始し，いずれもウズベク系の君主を戴くコーカンド・ハン国，ヒヴァ・ハン国，ブハラ・アミール国を圧倒的な軍事力で屈服させ，肥沃なオアシス地域に広大な領土を獲得した[1]．1867年，中央アジア最大の商業都市タシケントに設置されたトルキスタン総督府は，この新しい植民地を軍政によって統治することになる[2]．そして，フェルガナ盆地を支配するコーカンド・ハン国がキルギス遊牧民の反乱の中で自壊すると，1876年ロシアはハン国を併合してフェルガナ州に編成し，総督府の統治下に加えた．ヒヴァとブハラ両国は一部の領土を割譲した上で，ロシア帝国の保護国となった[3]．

トルキスタン総督府の成立によって，これまで中央アジアを漠然とさせてきたトルキスタンという地域名称は，初めてイラン，アフガニスタン，中国（当時は清朝）との国境を含む明確な境界線を持つことになった．およそ半世紀にわたるロシア統治の間に，このトルキスタンという地域概念は，現地のムスリム知識人によって自らの歴史的，民族的な郷土として意識されるようになり，20世紀初頭になると，トルキスタン人やトルキスタンの自治という民族主義的な表象として使われるようになった．

ロシアは，トルキスタンのムスリム社会に干渉することは避けて，地方行政の末端は現地民出身の官吏に委ね，遊牧民の慣習法や定住民のイスラーム法は，基本的にそのまま存続させた[4]．しかし，ロシアの木綿工業に原料を提供する

---

1) その詳細は，S.N. Abashin, D. Yu. Arapov, N.E.Bekmakhanova, O.V. Boronin, O.I.Brusina, A.Yu.Bykov, D.V.Vasil'ev, A.Sh.Kadyrbaev, T.V.Kotyukova, P.P.Litvinov, N.B.Narbaev, Zh.S.Syzdykova, *Tsentral'naia Aziia v sostave rossijskoi Imperii*, Moskva : Novoe literaturnoe obozrenie, 2008. 特に31-128頁参照．

2) 詳しくは，Khamid Ziyoev, *Turkistonda Rossiiatazhovuzi va hukumronligiga qarshi kurash*, Toshkent: Sharq, 1998参照．

3) 例えば，Khamid Ziyoev, *Ozbekiston mustaqilligi uchun kurashlarning tarihi*, Toshkent : Sharq, 2001. 特に131-176頁参照．

4) 19世紀から20世紀にかけてのこの地域にみられた政治・経済面の出来事については，ウズベキスタン国内で刊行されたKhamid Ziyoev, *Ozbekiston mustamlaka va zulm iskazhasida*, Toshkent : Sharq, 2006などがある．

タシケントの中央広場に，1913年に設置された初代トルキスタン総督のカウフマン像．写真はゴレンダー氏により提供されたものである．

ために，フェルガナ盆地を中心として綿花栽培が急速に拡大すると，商品作物の生産は農村社会の階層分化を促進し，行政の腐敗やイスラーム的社会秩序の解体とあいまって，ムスリム社会にはロシア統治に対する不満が蓄積することになった．ロシア内地とトルキスタンを結ぶ鉄道の建設とともに，主要な都市には来住したロシア人やアルメニア人の姿も目立つようになったが，彼らが住む新市街とムスリムの旧市街との間には，社会的にも文化的にも大きな障壁が存在していた．

一方，ロシア統治は，ここに新しいタイプのムスリム知識人を生み出す契機となった[5]．彼らは，ロシアを介しての近代文明の受容，民衆の啓蒙と教育の刷

5)　ジャディードについては，小松久男『革命の中央アジア—あるジャディードの肖像（中東イスラム世界）』，東京大学出版会，1996年．また，Adeed Khalid, *The Politics of Muslim Cultural Reform : Jadidism in Central Asia* (Comparative Studies of Muslim Societies, N.27), California Academy of Sciences, 1999参照．

伝統的な生活の中心であるタシケントの旧市街の姿.
【旧市街の姿とクカルダシュモスク、1928. タシケント、パノフ撮影】

新，口語に近い文章語の育成などの課題に取り組んだ．彼ら改革派知識人（トルキスタンでは一般にジャディードとよばれた）は1905年革命後，新聞，雑誌などの定期刊行物を武器に言論活動を展開し，しだいに民族主義的な色彩を強めていった[6]．しかし，彼らは1917年のロシア革命に至るまで，ロシアからの分離独立を唱えることはなく，つねにロシアにおける自治を求めたことは注目に値する．

ロシア統治の抱える矛盾は，1916年の大規模な民衆蜂起の時に明らかとなった．それは，第一次世界大戦下の1916年夏，カザフ草原とトルキスタンからおよそ40万人の男子住民を戦時労働に動員するツァーリの勅令が公布されたことに端を発した．この突然の動員令は民衆の強い反発を招き，各地に抗議行動さらには武装反乱の動きが広がった[7]．民衆の反感を買ったのは恣意的な行政を行ってきた地方の官公吏であり，キルギスやカザフの遊牧民地域ではスラブ系の入植者であった．

---

6) その一例として，『Taraqqiy』(1906年)，『Khurshid』(1906年)，『Shukhrat』(1907–08年)，『Osiyo』(1913年)，『Samarqand』(1913年)，『Sadoi Turkiston』(1914年)，『Sadoi Farg'ona』(1914年）などが挙げられる．詳しくは，Khamid Ziyoev, *Ozbekiston mustaqilligi uchun kurashlarning tarihi*, Toshkent : Sharq, 2001，特に303–304頁参照.

7) 詳細については，Khamid Ziyoev, *Turkistonda Rossiiatazhovuzi va hukumronligiga qarshi kurash*, Toshkent: Sharq, 1998, 特に400–431頁参照.

2. ロシア革命後の中央アジア

この1916年蜂起の翌年に帝政を打倒したロシア二月革命は，中央アジアにおいてもムスリム自治運動や改革運動の展開にはずみを与えた．カザフ草原ではカザフ知識人のアラシュ党，トルキスタンではジャディード知識人のイスラーム協議会がそれぞれ領域的な自治を求める運動を展開し，旧来のアミールやハンの専制が続くブハラとヒヴァの両保護国でも青年ブハラ人や青年ヒヴァ人による改革運動が生まれた．

しかし，レーニンらの主導した十月革命の結果，ロシア人労働者・兵士を主体に権力を握った中央アジアのソビエト政権は，ムスリムの自治運動には敵対的であり，革命直後コーカンドに成立したトルキスタン自治政府は窮地に立たされた．ソビエト政権からみれば，それは階級的な正当性を持たない，ブルジョワ民族主義者の政府にほかならず，大衆的な基盤と軍事力を欠いた自治政府は，ソビエト政権に対抗するすべがなかったからである．しかし，逆にトルキスタン・ムスリムの目には，人口54万人（全体の7.5％）のロシア人社会のさらにその一部が権力を独占する体制は，帝政の植民地統治の継続とみえたことも事実であった．

破局は1918年2月，コーカンドのトルキスタン自治政府がソビエト政権の軍事力によって打倒された時に訪れた．多数の市民が犠牲となったコーカンドの惨劇を契機として，フェルガナ盆地一体に「バスマチ（襲撃者）」の名で知られるパルチザン的な反ソビエト武装抵抗運動が始まったのである．バスマチは，ソビエト側が与えた呼称であり，現地民は武装集団のリーダーをコルボシとよんだ[8]．彼らの運動は，ソビエト政権による食料や家畜の強制的な徴発（戦時共産主義）やイスラームに対する冒涜行為のために急速に拡大し，ここへ投入された赤軍精鋭部隊との間で激しい内戦を繰り広げた[9]．

続いて1920年，ヒヴァとブハラ両保護国でも赤軍の介入した革命によって旧政権は打倒され，代わって青年ヒヴァ人や青年ブハラ人らジャディード知識人

8）「バスマチ」というタームはソビエト政権により，1920年7月号の*Zhizn' Natsional'nostei*（諸民族の生活）誌に掲載された「バスマチとの戦いの最前線」という記事で初めて導入されたという説がある．この言葉は，反ソビエト政権の立場で戦った勢力を示す．詳しくは，Naim Karimov, *Tarihning hasratli sahifalari*, Toshkent : Sharq, 2006, 特に90–125頁参照．

の主導するホラズムおよびブハラの両ソビエト人民共和国が成立した．しかし，生まれたばかりの両国でも多様な指導者に率いられたバスマチ集団が結成され，赤軍部隊との激しい戦闘が始まった．このような内戦状況は食料供給の途絶と相乗して各地に甚大な荒廃をもたらし，バスマチ勢力と赤軍部隊双方による徴発と圧迫に苦しんだ住民の間からは多数の移住者が生まれることになった．ある回想は，当時の状況を次のように伝えている．

> 革命後，私たちが住んでいた地域は「赤」（ソビエト政権とその支持者）とコルボシ（反ソビエト・ムスリム武装勢力とそのメンバー）の間に挟まれてしまった．この地域で革命に反対した人々はコルボシになり，革命派と戦っていた．ある時，彼らコルボシ同士でお互いに協定を結び，戦いを共にしたが，相互不信のために最終的には喧嘩別れに終わってしまった．
>
> 私たちの村の入口の一番近い所に住んでいたアリヨル・コルボシは，（自分の商売に不可欠であった）鉄道を他のコルボシたちから守ろうとしたが，「赤」に味方していると疑われて殺されてしまい，遺体は川に流された．
>
> 私の祖母も当時を地獄のようだったと思い返している．コルボシたちは村に来ては消耗した馬を残し，代わりに元気な馬を連れて行ってしまうのだった．また，「赤」やロシア人が来ると，彼らも自分たちの馬を乗り捨て，新しい馬を連れて行くのだった．
>
> しまいに，この地域にコルホーズができた時，祖母の家には1頭の馬しか残っておらず，それまでもコルボシと「赤」の戦いで奪われそうになったので，この最後の馬は家族皆で必死に守ったという．（証言者No. 25，ウズベク人，女性，ナマンガン）

---

9) ソ連時代のウズベキスタン史において，バスマチは「悪者」として解説されたが，独立後の時代においてはウズベキスタンの解放のために戦った勢力として扱われている．そのような解説の一例としては，Khamid Ziyoev, *Ozbekiston mustaqilligi uchun kurashlarning tarihi*, Toshkent : Sharq, 2001，特に331–373頁参照．日本語文献として，バスマチ運動とその評価の変化については次を参照．帯谷知可「フェルガナにおけるバスマチ運動1916–24年：シル・ムハンメド・ベクを中心とした『コルバシュ』たちの反乱」『ロシア史研究』51，ロシア史研究会，1992年，15–30頁；同「ウズベキスタンにおけるバスマチ運動の見直しとその課題」『地域研究論集』1–2，国立民俗学博物館，1998年，73–89頁．（本文は前頁）

バスマチ勢力の激しい抵抗に直面したソビエト政権は，優勢な軍事力でこれに対抗する一方，一般のムスリム民衆を中立化し，さらには彼らをソビエト政権の支持者に変えるために貧農に対する支援など，様々な施策を講じた．また，1921年から全ロシア規模で導入されたNEP（新経済政策）は，トルキスタンでも民衆の反感を買った戦時共産主義を改め，一定の枠内ではあったが自由な経済活動を許容することになった．1929年ソビエト政権の圧政を逃れて家族でカシュガルに脱出し，その後インドを経由してサウディアラビアに渡ったあるウズベク人亡命者も，この1921年からしばらくはアンディジャンの商工業が活気づき，一家の織物販売業も上向いたことを回想している[10]．しかし，このNEPも一時的な政策にすぎなかった．

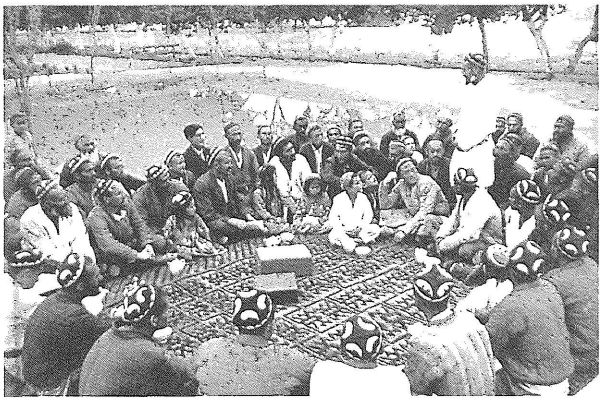
3. ソビエト体制の成立

ソビエト政権は，ほぼ1924年までに主要なバスマチ勢力を制圧すると，ようやく中央アジアにおける社会主義建設の一連の大事業に着手した．その第一は，革命後も帝政時代の行政区分に基づいていたトルキスタン，ブハラ，ホラズムのソビエト共和国をすべて解体し，代わりに中央アジア史上初めて民族別の共和国を編成する1924年末の「民族・共和国境界画定」であった．ウズベキスタンをはじめ，現代の中央アジア諸国の原型はこの時に成立し，順次ソビエト社会主義共和国としてソビエト連邦に加盟した．

もっとも，ウズベク人の国（ウズベキスタン）と言っても，ここにはタジク，トルクメン，タタールなど歴史的に多様な民族が居住してきた地域であり，住民の民族的な構成は決して一様ではなかった．そして，このような民族的な多様性は，ソ連時代の移住や開発政策によって多数の人々が連邦各地から移り住むことにより，さらに増大することになった．1970年ウズベキスタンの首都タシケントでは，スラブ系住民の方が，ウズベク人など中央アジア出身の住民よりも多かったほどである．

第二の施策は農業の集団化であった．ソビエト政権は，中央アジアの「封建

10）Sayfiddin Jalilov, *Bukhoriylar qissasi : Mukhojirat tarikhidan lavkhalar*, Toshkent : Islom Universiteti Nashriyoti, 2006, 45–55頁参照．



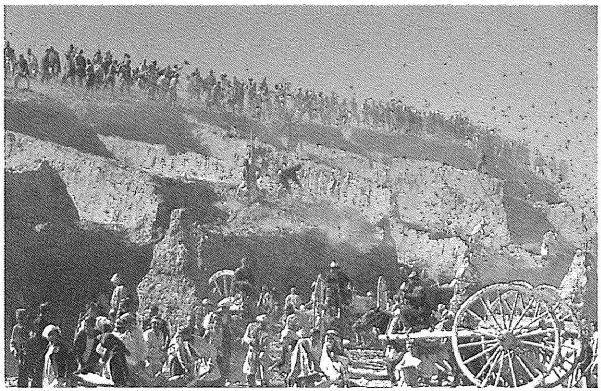
集団化の際に，コルホーズへの参加をよびかける会議の一場面．
【日時・場所不明，ペンソン撮影】

的」な社会を解体し，生産力の向上をはかるために，1920年代末から地主・富農層の土地や水利権，生産手段の国有化とそれらの貧農への分配，続いて農業の集団化（集団農場コルホーズの建設）に着手した[11]．それは，個々の農民が所有する土地をまとめて共同利用する土地共同耕作組合，ついで土地に加えて家畜や農具などの生産手段も共同利用するアルテリ，そして以上の完成型としてすべての要素を共有するコムーナの三つの形態からなっていた．農業集団化は，これまでの農村社会を大きく変え，トラクターの利用や灌漑耕地の拡大をめざした大フェルガナ運河の建設などとあわせて農業生産力を著しく高めることになった．

しかし，この間に発動された「クラーク（富農）撲滅」キャンペーンは，多数の有為の人材を投獄，流刑，あるいは処刑して，農村社会を震撼させた．「クラーク」の烙印を押されてシベリアやウクライナに移住させられた人々の多くは帰らず，農業経営の豊富な経験や知識を備えた人々の喪失は，農業生産そのものへも大きな打撃を与えずにはおかなかった[12]．

11）コルホーズ化と脱クラーク化（クラーク撲滅）政策については，Shamsutdinov R.T., *Uzbekistonda sovetlarning quloqlashtirish siyosati va uning fozhiali oqibatlari*, Tashkent : Shark, 2001 ; Shamsutdinov R.T., *Qishloq fozhiyasi : zhamoalashtirish, kiloklashtirish, surgun*, Tashkent : Shark, 2003参照．

12）集団化政策とその後に行われた弾圧に関するアーカイブ資料に基づいた研究については，Shamsutdinov R.T., Karimov N.F., Yusupov E. Yu, *Repressiia*, Tashkent : Shark, 2005参照．



ソビエト政権が実施した多くの事業の一例であるフェルガナ大水路の建設.【1939年】

第三の施策は工業化の政策である．革命前の工業は，綿花洗浄工場などに限られ，工業化は著しく立ち後れていたが，五カ年計画の遂行とあわせて，農業機械や鉱業部門を中心に徐々に進展しはじめた．当時のスローガンは，「機械がすべてを決める」であった．工業化はロシアなど連邦内諸地域からの技術者や労働者の移住もともなっていた．工業化が大きく前進したのは，第二次世界大戦中のことであった．ナチス・ドイツ軍の侵攻にともない，ソ連西部の工業地域から大量の工場施設や要員が中央アジアに疎開したからである．

第四の施策は，中央アジア現地諸民族の出身者を共産党や行政，産業，文化の様々な部門に採用する現地民化，すなわちコレニザーツィヤの政策であった．これは，帝政時代の差別的な政策を撤廃し，ウズベク語など中央アジア現地の言語を行政や教育に用いるほか，ソビエト教育施設で養成された民族エリートを幹部として幅広く登用することを目的としていた．それはソビエト政権の標榜する民族の平等と接近を実現するための方策であったが，1930年代に入ってスターリンの独裁が強化されるとともに放棄され，むしろロシア中心主義が強まった．1930年代末のスターリン大粛清は，コレニザーツィヤの成果ともいえる多数の民族エリートを抹殺したことで知られている．政策民族エリートの登用が再開するのはフルシチョフによるスターリン批判以後のことであり，後述するウズベキスタン共産党第一書記ラシードフは，その代表的な存在である．

集団化は，これまで機械を購入する資金がなかった農民に，農作業における農業機械使用の可能性を与えた．【ウスマノフやチュルパン・ハムラクロフ，アブラス・ムミノフたちの綿花畑における農作業の様子，1939年，アンディジャン，ペンソン撮影】

そして最後に挙げることができるのは，イスラームに対する抑圧的な政策である．ソビエト政権は，イスラームの制度や慣行を中央アジア社会の後進性の要因，社会主義建設の障害とみなし，1920年代後半からイスラームに対する激しい攻撃を開始した．その結果，ほとんどのモスクとマドラサ（高等学院），マクタブ（初等学校）などが閉鎖され，それらの経済的な基盤をなしていたワクフ財産は国有化された．ムスリム知識人・聖職者に対する抑圧もしだいに激しさを増し，スターリン大粛清は，中央アジア・ムスリム社会の知的伝統の継承にも大きな打撃を与えた．歴史的に使われてきたアラビア文字も，1920年代末には廃棄され，ラテン文字の使用を経て，1930年代末からはキリル文字が採用された．それがロシア語の浸透に道を開いたことは言うまでもない．

4. ソビエト政権と国民

このように，中央アジアは帝政ロシアによる植民地化を経て，ソビエト体制の中で巨大な変容を経験し，ソビエト文明を受容することによって現代化の道を歩んだ．これは南接するアフガニスタンやイランをはじめとして他のイスラーム諸国とは大きく異なる現代史である．共和国の枠組みと民族エリートの形

国民代表会議への参加のための代表者の出発．ソビエト政権が打ち出した女性の社会復帰キャンペーンの一環として，女性の代表会議への参加が認められるようになった．【ブルカを被った女性も参加した会議への代表者の出発，1929年，ブハラ】

成，農業と工業生産力の飛躍的な増大，平等な法と社会制度，教育の普及と科学技術の発展，現代文化の受容，保健衛生の向上，都市化の進展と交通運輸システムの整備，ムスリム女性の解放と社会進出など，中央アジア人がソビエト文明から享受した要素は実に重要であり，これらは今も中央アジア社会の基盤をなしているといっても過言ではない．

しかし，その一方でソビエト体制は，共産党の一党独裁やイデオロギーの統制，スターリン時代の大粛清，連邦内での経済的な南北格差，民族文化の退潮（特に言語面でのロシア語の優位），イスラームに対する抑圧など，負の要素を少なからず抱えていたこともまた事実であった．もっともこうしたことが公然と語れるようになったのは，ソ連末期，1980年代後半のペレストロイカ時代のことである．

このような正と負の要素をあわせもったソ連時代を，一般の人々はどのように生きたのだろうか．こうした人々の記憶をたずねることが本書の目的である．詳細は以下に譲ることにして，ここでは二つの発言を紹介しておこう．これらは体制に妥協しながらも，自存をはかった人々の姿を反映しているかもしれない．

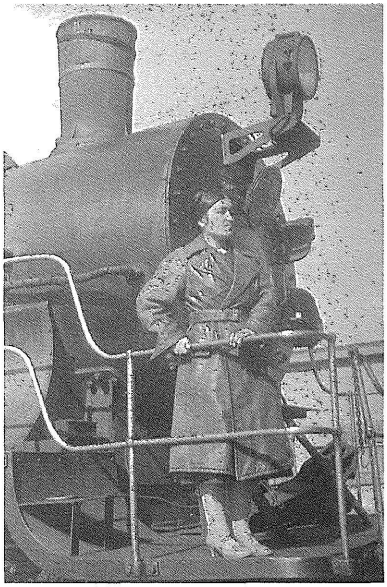
ソビエト政権による子どもに対する識字教育の実施.
【勉強中の女の子，ペンソン撮影】

1990年代の初め，ある研究者はこう語っている[13].

ウズベキスタンは強制的にソ連に引き入れられたという意見もあるが，それはちがう．当時のウズベキスタン（ウズベク・ソビエト社会主義共和国）の指導者は賢く，ロシアやソビエト政権に反対すれば力づくで抑えられ，ウズベキスタンの発展も安定もありえないことをわかっていた．そこで，彼ら（ウズベキスタンの指導者）はロシアと妥協し，独立を犠牲にして国を守ったのだ．その代わりに，ソビエト政権（やロシア人）はウズベキスタンの運営を現地の人（ウズベク人）に任せた．それこそが最大の勝利であり，ウズベキスタンはソ連が提供した発展の可能性を最大に活かしてきたのだ[14].

13）著者がA.R.O（前共産党教育学校教員でウズベキスタンの大学の准教授）に対して行ったインタビュー，1994年5月.

14）ソ連時代を中央アジアが植民地化された時代として考える研究者もいるが，このような見解にみられるように，ソ連の中央アジア支配を植民地化と単純に定義付けず，この時期と国民と政府の関係をより複雑な構造としてみたのはソ連の研究者のみならず，海外の研究者の研究にもみられる．例えば，旧ソ連中央アジアのソ連時代とアフリカのフランス支配下時代を比較し，それぞれの政策の共通点と類似点を指摘した興味深い研究としては，Moshe Gammer, "Post-Soviet Central Asia and Post-Colonial Francophone Africa : Some Associations", *Middle Eastern Studies*, Vol. 36, No. 2 (Apr., 2000), 124–149頁がある．また比較の観点からソ連を分析したのは，Robert Strayer, "Decolonization, Democratization, and Communist Reform : The Soviet Collapse in Comparative Perspective", *Journal of World History*, Vol. 12, No. 2 (Fall, 2001), 375–406頁参照.



運転助手で優秀な労働者となったバショラト・ミルババエワ．ソビエト政権による女性の社会進出キャンペーンが成果を上げ始めた．
【1940年，タシケント，ハイトムハメド撮影】

もとより政治に関与するすべを持たなかった人々は，政治に関しては無力感と無関心を示し，国の政策に従い，体制に妥協する一方で守るべき所は守りながら，日々の生活の問題を解決しようとしていたようにみえる．人々の語る記憶には，政治にふれる部分が少なく，経済事情や教育に関することが大半を占めている．これは現地出身のウズベク人だけではなく，1930年代にロシアからウズベキスタンに移り住んだ人の場合も同様である．彼らは厳しい経済事情や制限の多い政治体制のもとでも，自分たちの生活を守ってきた．人々は，教育や医療サービスは無料で提供され，国家が雇用主である経済システムの中で100％の就業率を保障される代わりに，言論の自由や政治活動の制限を受け入れていたのである．

私の親はサラトフから1930年代にウズベキスタンに来た．その時から私

は一度もその選択を後悔したことはない．私の両親がウズベキスタンに来た主な理由は，当時彼らが暮らしていたロシアの食糧不足にあった．ウズベキスタンでの生活は比較的楽だったし，生活環境も非常によかった．

私たちが来た時，現地の学校は男女別に分かれていたが，共学の学校もあった．先生は私たちのことをとても気にかけながら勉強を教えてくれた．先生は私たちに，わからないところはないか，とよく聞いてくれた．彼らの教育方針とは，国民として，共産主義のために自分たちの人生を一所懸命に生きなければならないということだった．そのような先生の気持ちに応えて，共産主義とスターリンのことを信じて生きてきた．

私が働き始めた頃は，非常に厳しい時期だった．服もなく，給料も安かった．しかし，しだいに物価も下がり，私たちの生活もよくなっていった．多くのものを分割払いで買うことができた．私は当時，ソ連すべての共和国の首都を訪ねたいと思い，毎年どこかへ行っていた．しかも，自分の給料だけで，汽車賃よりはるかに高い飛行機を使って旅行していた．また，医療も教育も無料で受けられた上に奨学金（制度）まであったくらいだ．

その後結婚したが，夫は非常に責任感の強い人だった．1986年にチェルノブイリの事故があった時，彼は最初の部隊員としてチェルノブイリ原発に入り，人々の救助と事故の処理にあたった．彼らの上司が，「3回原発に入り，戻ってきたら家に帰す」と約束したため，彼は一番にそれをやってのけ，致死量を超える放射線をあびた．そのために彼は亡くなってしまったけれど，私は彼と自分の人生を振り返ってみて非常に誇らしく思っている．同時に，やはり時代というものは，それぞれの世代によって書き換えられるし，そういう意味では歴史は一つではないと思う．

私たちにとって共産主義も私たちの夢も一所懸命な労働も，その時代には，そして私たちにとってはとても大切なことだった．現在，今の世代の（若い）人からみると，それは間違っていたと言われるかもしれない．私はその見方を否定はしないけれど，私たちの生き方が間違っていたとは決して思わない．（証言者No. 31，ロシア人，女性，アンディジャン）

ソ連時代，ナチス・ドイツとの壮絶な戦い，すなわち「大祖国戦争」後のウ

ズベキスタンの現代史は，戦後復興と政治，経済，社会，文化などあらゆる領域でのめざましい発展の歴史として描かれることが常であった．例えば，1968年刊の『ウズベク・ソビエト社会主義共和国史』第4巻は，戦後期（1945–1950）における「国民経済のさらなる発展」を説明した後，1951–1958年を「社会主義建設の完了期」，1959–1967年を「社会主義建設の完了期と共産主義への漸進的な移行」と表現し，「社会主義文化の開花」と「第23回ソ連共産党大会と新五カ年計画実現のためのウズベキスタン勤労者の闘い」をもって現代史の叙述を終えている．1974年刊の全1巻の共和国史では，ソ連共産党の新しいテーゼに基づいて，1959年以降は「発展した社会主義期」と説明されているが，右肩上がりの発展を描く姿勢に変わりはない．

しかし，ソ連からの独立後，現代史の評価は一変する．例えば大統領直属の「国家と社会建設アカデミー」が編集した『ウズベキスタンの新しい歴史』第2巻（2000年刊）では，ウズベキスタンを「専制的なソビエト国家に組み込まれた」国と前提した上で，1945–1985年を「専制的な体制の基盤に綻び」が生じた時期ととらえている．そこには「発展した社会主義」の栄光はもはやみられない[15]．

ま と め

このようにソ連時代と独立後では現代史の評価は完全に逆転していると言ってよい．独立後の体制が，ソ連の「専制時代」を批判することによって自らの正当性を主張していることは明らかである．しかし，ウズベキスタンの現代史をソ連時代の一方的な断罪によって描くことは無理であろう．われわれは，いずれも政治的なイデオロギーに制約された二つの極端な解釈から離れて，現代史の真相を見出さなければならない．こうした試みを行う上で，ソ連時代を自ら生きた人々の証言は，公的な史書や資料とは別の次元で，きわめて大きな意味を持つに違いない．本書はそのためのささやかな一歩である．

---

15) *Ozbekiston sovet mustamlakachiligi davrida, Ozbekistonning yangi tarixi*, Ikkinchi kitob, Toshkent: Sharq, 2000, 586頁．なお，独立後のウズベキスタンにおける新しい「国史」のはらむ諸問題については，帯谷知可「ウズベキスタンの新しい歴史—ソ連解体後の「国史」叙述のいま」森明子編『歴史叙述の現在—歴史学と人類学の対話』，人文書院，2002年，146–169頁参照．